

2011 年度 日本スポーツ社会学会 第 1 回「定例研究会・学生会員プレフォーラム」開催報告

日本スポーツ社会学会研究委員会では、研究活性化の一環として、去る 2011 年 11 月 27 日に第 1 回定例研究会、学生会員プレフォーラムを実施しました。また、3 月の学会大会に予定されていた公開記念セッション『トップスポーツの危機』もあわせて開催されました。以下、研究会の内容についてご報告いたします。

日時：2011 年 11 月 27 日（日）9:30-16:40

場所：成蹊大学 10 号館 2 階大会議室、4 号館ホール

1. 定例研究会

報告者：浜田雄介氏（広島市立大学）、藤川恭英氏（世田谷区役所）

山田ゆかり氏（早稲田大学非常勤）、原尻英樹氏（立命館大学）

司会：菊幸一氏（筑波大学）、コメンテーター：北村薫氏（順天堂大学）



2. 学生会員プレフォーラム

登壇者（世話人）：山崎貴史氏（筑波大学大学院）、黒須朱莉氏（一橋大学大学院）

鈴木楓太氏（一橋大学大学院）

コメンテーター：渡正氏（徳山大学）

3. 『トップスポーツの危機』

成蹊大学創立 100 周年記念行事・日本スポーツ社会学会創立 20 周年記念シンポジウム

登壇者：長塚智広氏（一般社団法人アスリートソサイエティ理事）

市原則之氏（JOC 副会長）

杉山茂氏（スポーツプロデューサー）

相馬浩隆氏（JOC キャリアアカデミー事業アシスタントディレクター）

司会：水上博司氏（日本大学）、菊幸一氏（筑波大学）

1. 第1回定例研究会 テーマ「スポーツと教育」

○司会：菊幸一氏（筑波大学）

①浜田雄介氏（広島市立大学）：「『体験』としてのスポーツ」から考えるスポーツと教育」

浜田氏は、これまでスポーツ社会学で主に採用されてきた「教育におけるスポーツの社会的機能」という視点（制度論）ではなく、「スポーツ体験」を起点とした視点（体験論）を採用することで、「制度論」と「体験論」の交点に「他者とともに身体を動かす体験にもとづいた主体」の措定を試みる。メルロ＝ポンティの「制度化」概念、「前人称的な主体」（能動的な”I”）の概念を整理しながら、S フリースクール（子どもたちの自立支援を目的とした活動）の実践にもとづき、子どもたちの体験が制度的な教育の場でどのような意味を生成していくのかについて、事例報告がなされた。



②藤川恭英氏（世田谷区役所）：「社会システムとしての部活動構造に関する研究」

藤川氏は、総合型地域スポーツクラブ、世田谷区立中学校の部活動と教育をめぐる関係性をときほぐしながら、教育>スポーツという潜在的機能が絶えずささやかれ続けることで、スポーツが「体育」という範囲につねに押しとどめられていくことを指摘した。例えば、地域スポーツ振興の一翼を担う総合型クラブの存在が、しつこく担うべきとされる学校部活動の停滞を招き、施設利用でも不利益を被るという言説が流布することで、総合型クラブの実践が内集団（学校）に対して、外集団（非難される存在）に留め置かれる実態を明らかにした。そこからスポーツ>教育という、地域における具体的施策の必要性と展開可能性が報告された。



③山田ゆかり氏（早稲田大学非常勤）：「地域スポーツクラブの創設の理念と運営」

山田氏は、これまで競技スポーツ体験しなかった子どもたちに、スポーツをツールにしていかに「ライフスキル」をはぐくませることが可能なのかという観点から取り組んだ、「飛騨シュール」という20名の小中学生の教育実践について報告を行った。行政や教育委員会を介在させず、彼らの理想とする競技スポーツに頼るのではなく、自然と身体への気づき、体験を重視し、子どもを取り巻く親をも含み込んだ啓蒙・啓発活動の事例が紹介された。また、そこから拡張したYYキッズ倶楽部（総合型地域スポーツクラブ）の実践についても報告がなされた。



④原尻英樹氏（立命館大学）：「武道教育の義務教育化と体育教育の活性化との関連性」

原尻氏は、2012年度から実施される武道カリキュラムの必修化（中学校）を受けて、武道概念の規定なしにカリキュラムを実施することへの批判的スタンスから、「身体を使った知的な活動」になり得る武道教育が思考のない単なる運動の実践に終わることを危惧し、武道の知的な側面をとらえ返すことで、体育教育を再考する契機にしようとするものである。本報告では、具体的な伝統的武術の技を動画で説明しながら、近代的説明では解明できない身体の原理について説明がなされた。そこから、近代的合理性のもとにそぎ落としてきた前近代の身体の解明を通して、近代の教育、ひいては近代的武道を相対化する視点を獲得しようとする試みが報告された。



○コメンテーター：北村薫氏（順天堂大学）

4 報告を通して、北村氏からは浜田氏をはじめ教育という制度を批判的にとらえ返そうという問い（例えば経験論への注目）・傾向に対して、あえて、制度の側から見返すとどのようなことが言えるのかが問い返された。そもそも教育という営為は、学習者が感じ、学んでいく側面に教育者の働きかけが存在する。そこには教える者の喜び、感動なども含まれる。また、制度内／制度外教育という言葉で表現されるように、制度では解決されない副産物も存在する。これら教育の制度はそもそもわれわれが長年かけて作り出してきたものであり、近代の特徴によって作られたものでもある。近代教育を相対化する視点とは、前近代の視点から見返すことだけではなく、近代教育がいかに作られ、変容をとげてきたのかについて解き明かすことであり、制度を単に作り替えるのではなく、制度がもたされた思考様式を問い返し、変更していくことで実現するのではないか、ということが示された。



○フロアとのディスカッション

最後に 4 報告者を交えて、フロアと報告に対するディスカッションを行った。スポーツ社会学がつねに課題としてきたスポーツ／身体という特殊な経験をとらえる際の社会学／スポーツ社会学理論という対立、理論を適用した際にこぼれ落ちてしまう事象とのズレの感覚をどう考えるかという問題がまず議論となった。また、総合型地域スポーツクラブやNPO 組織という制度の登場によって、競技スポーツのもつ問題性という古くからある問いがより鮮明に浮かび上がったのではないかと、その際、近年の地域社会へのスポーツの伝播はこれまでの状況とどのような相違がみられるのか、といった問いが提起された。

これに対して発表者からはスポーツという制度にもとづいた経験が発動させる身体への

気づき、さまざまな感覚をどのようにとらえ返し、理論化し、実践していくのかといったことに対するそれぞれの応答があった。また、「身体が身体ではなくなっている」という率直な感想、すなわち、近代的な教育という領域が制度疲労をおこしており、教育とは何かを問い返す明確な時期にきていること、教育に対して応えられる領域が「身体を使った教育」であり、そこにスポーツの可能性を見いだせるのではないか、といった応答がなされた。

最後に、司会の菊氏からは、誰のための教育、スポーツなのかを改めて問い返す視点をもち続けることの重要性が示された。これまでのスポーツ社会学会での研究蓄積は事象の後追いの印象があり、近代的教育に疑念を抱き、問題点を感じてきた人びとの実践が先行しているように感じられる。近代スポーツによる教育は前近代的な身体技法を禁止、合理化することで発展してきた。これらがどのような社会との関係性で可能になってきたのかについて、歴史的イマジネーションをもちながら問い返していく作業が必要であること、そのことは次回の定例研究会のテーマでもある「スポーツと政治」について考えていくことの裏返しである、というまとめで結ばれた。(文責・石坂)



2. 学生会員プレフォーラム

第1回学生会員プレフォーラムが開催されました。この会は、平成24年3月18日に熊本大学で行われる「第21回スポーツ社会学会大会」〈学生会員フォーラム〉の開催に向けて、学生会員の交流を図ることを目的に、企画されたものです。

当日は、『スポーツ社会学研究』第8巻の特集、「スポーツの20世紀」を取り上げ、世話人である山崎・黒須・鈴木が発表、コメンテーターとして渡正先生（徳山大学）をお呼びし、スポーツとスポーツ社会学のこれまでを振り返るとともに、スポーツ社会学の意義と課題を議論しました。世話人を含め学生12人、教員8人が参加し、フロアからもさまざまな意見が出されました。スポーツ社会学の課題として、「理論と方法の洗練化が求められる」などといった鋭い指摘がなされるなど、スポーツ社会学に関する認識を高める場となりました。



次の第2回プレフォーラムは平成24年1月28日に予定しています。また、12月18日（13時・立教大学）と2月（日時未定）には一度ずつ個人発表を行う機会を設けて、学生会員の交流と研究の推進を目的に開催します。より多くの学生会員が継続的に参加できるようにしていきたいと思います。（文責・山崎）

以上